

教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	北陸先端科学技術大学院大学	申請分野(系)	人社系
教育プログラムの名称	グループワークによる知識創造教育（多様性を活かす大学院教育に向けて）		
主たる研究科・専攻名	知識科学研究科知識社会システム学専攻、知識システム基礎学専攻		
（他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名）			
取 組 実 施 担 当 者	（代表者）梅本 勝博		

〔教育プログラムの概要〕

本学は、日本における大学院教育・研究・経営を改革・先導するために創られた日本最初の独立大学院である。1990年の創設以来、教育・研究・経営の分野で様々なイノベーションを実施してきた。本プログラムは、パイロット・スクールとしての本学が、教育分野でのイノベーションとして最近発表した、学生一人ひとりのキャリア目標の実現を支援する新教育プランの一環である。

近年、本学に限らず大学院では学生が多様化しており、新卒学生に加えて、多様な年齢層の社会人学生や、世界中からの留学生が増えている。そのように多様な背景と目的を持って入学してくる彼らをどう教育して彼らのキャリア目標の実現を支援するのか、が大きな課題になっている。また、これまで大学院では、グループワークを重視した教育はあまりおこなわれてこなかったが、社会の仕事のほとんどは何らかの協働を伴い、21世紀の「知識社会」では多様な専門職種の人たちが協力しながら知識と価値を創造する知的協働能力が求められている。

多様性は知識創造には欠かせない条件であるが、本プログラムを推進する知識科学研究科は、1) 異なる専門背景を持った教員の教育研究分野の学際的多様性、2) 様々な学部出身者、経験的暗黙知を持つ社会人、新しい学術的知識を持つ新卒が入り交じる学生集団の多様性、3) 男性と女性のジェンダー的多様性、4) 最近の留学生増加による国際的・文化的多様性という重層的な多様性に特徴がある。その意味で、本研究科は「知識社会」が求める知識創造能力を持つ人材を育成するのに誠_にふさわしい環境を備えている。

本プログラムの目的は、そのような多様性を活かしながらグループワークを通じて知識を創造できる研究者や高度職業人を養成することである。

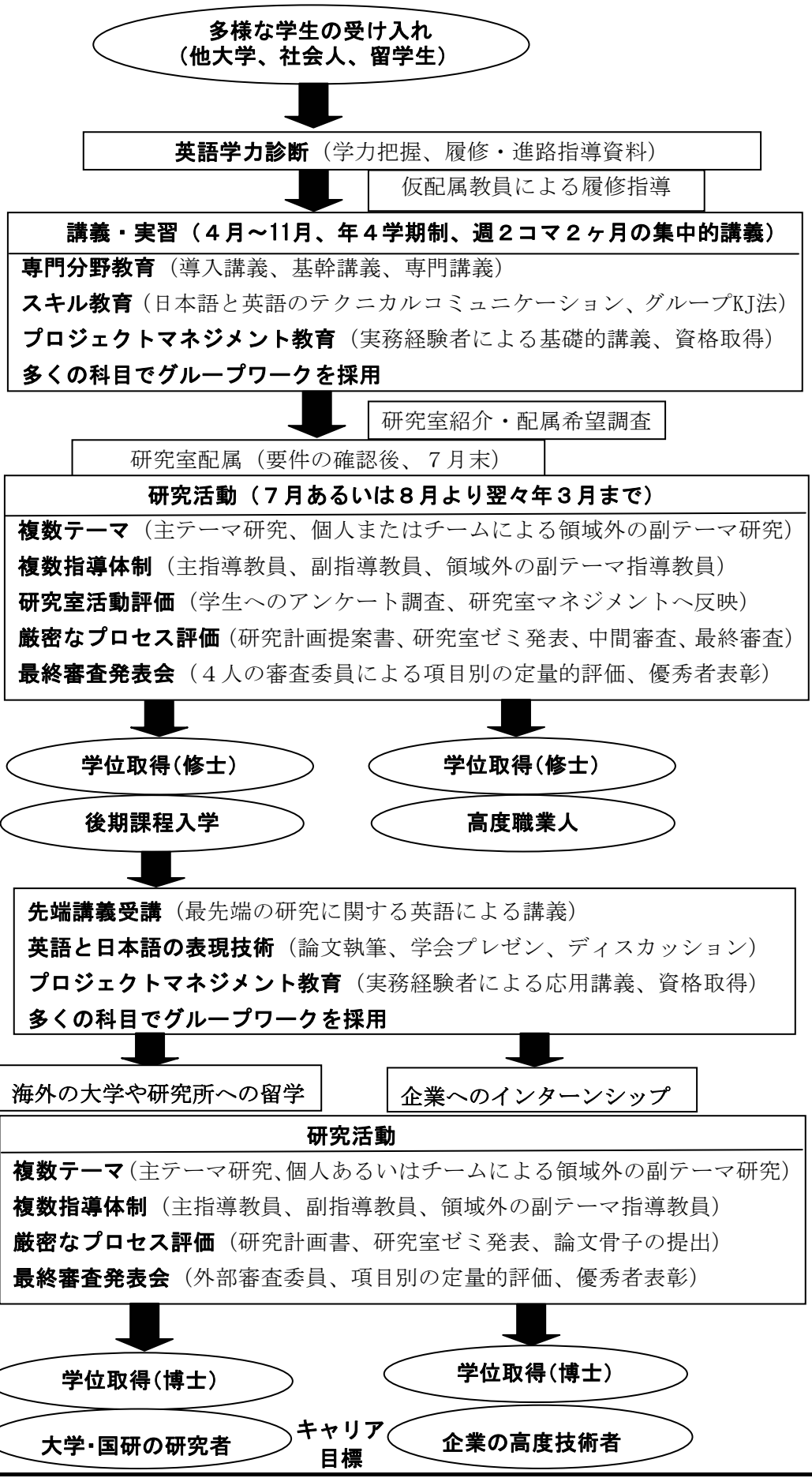
具体的な内容は以下の通りである。

- 1) 研究科が当初から実施してきたコースワークでの学生グループによる事例討議や調査研究などのグループワークをさらに推進し、異分野・異文化の人たちと協働する能力を学習させる。
- 2) 既存の英語テクニカル・コミュニケーション教育に加えて、新たに日本語技術教育を提供し、知識の伝達・共有のためのコミュニケーション能力を習得させる。
- 3) 知の創造・共有・活用の理論・実践であるナレッジ・マネジメント（知識経営）の理論を学びながら、ナレッジ・マネジメントの技術・手法とグループKJ法やブレインストーミングなどの集団的知識創造手法を習得させ、知識創造を体験させる。
- 4) 学生向け公募提案型研究助成制度を通じて、学生チームに地域の組織（行政、企業、小学校など）との交渉、それらの組織の抱える問題を科学的に解決するアクションリサーチ・プロジェクトのリサーチデザイン/助成申請書執筆、リサーチの実行（文献研究・フィールドワーク）、研究報告書提出・プレゼンまでの一連の知識創造プロセスを体験させる。
- 5) 日本プロジェクトマネジメント協会との産学連携を通じて、協会が派遣する実務経験者によるプロジェクトマネジメント教育と、協会の会員企業のプロジェクト現場を体験するインターンシップを提供し、学生にプロジェクトを企画しマネージする基礎的能力を体得させる。

履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。）

幅広く、きめ細かな複数指導体制
キャリア目的に応じた実践的教育

自由な環境での自立支援
キャリアタイプ別の指導



<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、人材養成目的が明確に掲げられており、それに沿った教育課程が体系的に編成され、その展開のために充実した指導体制が整備されている点は評価できる。また、研究室内での教育活動の評価や、授業技術についてのデータベースなど、先進的なファカルティ・ディベロップメントの取組や、外部からのアカデミック・アドバイザーを配置した自己点検・評価体制は優れている。

教育プログラムについては、多様性を活かしながらグループワークを通じて知識創造できる研究者・高度専門職業人を養成するという目的を具現化するため、特に、グループワーク重視の教育方法を採用して学生の知的な相互協働により知識創造能力を高めようとしている点、学生向け公募提案型研究助成制度によりアクション・リサーチ・プロジェクトを通して学生に自ら知識創造を体験させようとする点が高く評価できるが、教育プログラムの実効性をより高めるため、グループワークの具体的内容を更に明確にすることが望まれる。